現代行動科学会誌　第38号，73－77（2022）

【特集】東日本大震災からの 10 年、そして、これから…
—現代行動科学会第 38 回大会テーマセッションから—

テーマセッション
「東日本大震災からの 10 年、そして、これから…」の趣旨と成果

企画・司会　織田　信男（岩手大学）

１　テーマセッションの趣旨とシンポジスト、指定討論者の紹介

本学会では、事務局が東日本大震災の三大被災県の一つに位置し、会員の多くが震災の経験を公的にも私的立場でも様々なる経験をしてきたことから、これまでにも第 28 回大会で「東日本大震災津波を経験して」、第 29 回大会で「震災津波から１年８か月を経て—行動科学それぞれの視点から見えてきたこと—」と複数回にわたり取り上げてきた。そこで、常任理事会では、2021 年は震災から 10 年が経過する年なので、学会員のそれぞれの持ち場・立場で公的にも私的にもいろいろなスタイルで活動（教育・支援・創作等）を行ってきた経緯を振り返り、そしてこれからのことを考えていく機会になることを目指すこととなった。

４人のシンポジストの選定基準は、被災地に関連のある活動従事者であり、性と年齢のバランスも考慮した。まず、久保香世さんは、震災前後は岩手県スクールカウンセラーとして活動していたが、震災後は家族とともに福島県へ移住し、福島県のスクールカウンセラーとして８年間活動している。大坂瑞貴さんは、震災時に宮城県に在住し、その体験を詩や写真で表現し、大学時代以降は歌人として短歌を詠み、故郷への想いを幅広い層の人々に伝えている。佐々木誠さんは、震災後、岩手大学三陸復興・地域創生推進機構の特任准教授として岩手県釜石市に移り住み、沿岸地域においてこころの支援活動と心理教育に尽力した。五味壮平さんは、岩手大学の教員として岩手県陸前高田市に数百回以上通い続け、人と人とが結びつく様々な活動（関係人口の創出と拡大）をしている。

２　セッションの概要

４人の発表では、地元の人々から受け入れられるまでのご苦労や工夫を写真や文章を用いて簡潔に示していただき、さらに活動を通して得た知識、知恵、感動をも発表いただいた。他の学会の発表とは異なり、社会からの、または社会への視点だけでなく個としての視点も取り入れていただいた発表は、行動科学研究室が長年大切にしてきた複眼的視点の実践の一つであろう。本セッションに参加した皆さんは、各シンポジストの様々なる意匠と経験を理解し、明日からの自らの諸活動にいろいろな形で活かすことになるであろう。